

2012 年度前期授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 戸部 順一

文芸学部開設科目の授業評価アンケートへの回答率は昨年度と比して、大幅に伸びた。対象科目数が 176 科目と、きわめて多かったにもかかわらず、92 パーセント以上の科目から回答を得たことは、この制度の重要性への認識が浸透したあらわれと、歓迎したい。

数字を眺めて一喜一憂することに、どれほどの意味があるかは不明であるにせよ、それから見えてくることも確かにある。例えば、履修者数と回答者数の比率が 76 パーセントを超えていることから、授業への学生の出席率が高かったことが見えてくる（大学全体のそれは 66 パーセント。また設問 1「この授業によく出席した」で、80 パーセント以上の出席率と回答した受講生が 9 割を超えているが、上述の比率と照らし合わせたとき、受講生がアンケートに真摯に回答している姿が浮かんでくる）。あるいは昨年度との数字の比較からは、教員の授業改革の成果が見て取れる。教室以外の場における受講生の自発的学習の割合の向上は、教員が受講生に興味深い授業内容を展開していること、受講生の関心の高さが積極的に授業に取り組もうとする姿勢を生んでいること等を語っている（設問 14「予習または復習をよくした」が昨年度においては 3.44 であった—この数字も大学全体の 3.07 からすれば決して低くはない—のに比し、今年度は 3.48（大学全体では 3.13）に上昇している。設問 2「授業中意欲的に取り組んだ（ノートをとる等）」の平均値が 4.18 と高いこと、あるいは設問 11「この分野の関心と学力が得られた」が 4.16 であったことも、これを裏付けている、と言えよう）。受講生全員が全ての履修登録科目に強い関心を持ち、積極的に予習、復習に励むことが現実にはありそうもないとき、この 3.48 という数値は誇るべきであろうか。

設問 1~13 の中で、4.00 を下回っているのは、設問 6「この授業のレベルはあなたにとって適切であったか」であった（3.91）。授業内容が難しすぎたのか、それとも易しすぎたのか。授業内容に不満を抱いている受講生はそれほど多くはないが（5 段階評価のうち、2、1 を否定的評価としたとき、その割合は全体の 9.6 パーセントに過ぎない）、きわめて満足度が高いと回答した受講生割合も高くはない（5 の評価を与えた受講生は 32.7 パーセント。この数は、他の設問で 5 の評価を与えている受講生割合が 50 パーセントを超えるものがあったのと比べたとき、少々、見劣りする）。数値を上げようと、授業内容を易しくする必要はないが、難しいことを易しく教える工夫の余地はまだあるだろう。我々の努力は設問 6 の改善にあるように思われる。

設問 12「総合的にこの授業を評価できる」が 4.33 の高評価を得たことに鑑み「文芸学部の開設科目は、その内容においても、その授業方法においても、うまくいっている」と判定してもよさそうだが、この評価に満足することなく、これまで以上の努力を教育に注いでいくことが、アンケートに回答してくれた受講者への我々教員の回答であることを宣言しつつ「授業評価アンケート集計結果に対するコメント」を締めくくりたい。